様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０９０１

研究課題名（和文）ミノア・ミュケナイ期～前古典期における国家と宗教の諸相と変容に関する研究

研究課題名（英文）Study on the Aspects and Transfiguration of the state and religion from Minoan-Mycenaean period to Early Iron Age-Pre-classical period

研究代表者
山川　廣司（YAMAKAWA, HIROSHI）

愛媛大学・法文学部・客員教授

研究者番号：３０１１３６８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円、（間接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ミノア期から前古典期までの長期間にわたる国家権力の担い手の変遷とそれに伴う宗教の諸相と変容について考察した。
クレタとペロポネソスでの現地調査の成果をふまえ、(1)ミュケナイ期の権力者は自らの天空神信仰を中心とする宗教に地母神信仰の先住民の宗教を取り込みながら宗教儀式を通して権力の維持強化を図ったことを解明した。(2)初期鉄器時代の宗教がどのようにポリス時代の宗教に変容したかを、クレタ島における法碑文の成立状況を題材に、法顕現のトポスとなる「聖なる空間」の象徴的意味をクレタ各地の聖所・神域・神殿の歴史的変遷に照らし合わせて考察し、アーケイック期に地母神から男性神への変容を解明した。

研究成果の概要（英文）：In this Study, we tried to explicate the transfiguration of the authority of the state and the accompanyingaspects and transfiguration of religion from Minoan period to Pre-Classical (Archaic) period.
On the basis of the field study in Crete and Peloponnesus, we illuminated as follows: (1) the rulers in Mycenaean period sought to maintain and to reinforce their sovereignty through the religious rites incorporating the religion of native peoples who worshiped the earth goddess into their worship of the sky god: (2) on the transition of religion from Early Iron Age to Archaic period, we explicated the transfiguration of worship from the earth goddess to the sky god, considering the establishment of law inscriptions in Crete and comparing the symbolic meaning of 'sacred space' , that is, topos of manifestation of law with the historical transition of sacred places, the precincts of shrines, sanctuaries in Crete.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：ギリシア宗教　国家　王権　ミノア期　ミュケナイ期　初期鉄器時代　アーケイック期　クレタ

１．研究開始当初の背景
ミュケナイ期の宗教については、近年考古学の発掘成果や線文字Ｂ粘土板文書史料などを援用して、W.Taylour, J.Chadwick, B.Rutkowski, W.Burkert, R.Castleden, R.Laffineur らによって解明されてきたが、我が国では、ミノア・ミュケナイ期から初期鉄器時代（暗黒時代）・前古典期（アーケイック期）の長期間を、時系列を軸に個人で研究を行うのは困難であり、未だ本格的な取り組みがなされていない。
また研究代表者は 2000 年より愛媛大学の学内共同研究「四国遍路と世界の巡礼」プロジェクトに参加し、四国遍路との比較の視点から古代ギリシアの巡礼活動を研究課題に、主として古典期からローマ期にかけての古代ギリシアの宗教活動としてエピダウロスのアスクエピオス巡礼とデルフォイのアポローン神への神託巡礼を採り上げた。その過程で前古典期以前の宗教に遡って考察する必要性を感じた。すなわちエーゲ文明期の宗教がミュケナイ社会崩壊後、どのようにして初期鉄器時代以降のゼウスを主神とするオリンポス神の宗教に変容して行くのか、自然崇拝から派生した民衆信仰がどのように国家宗教に取り込まれていくかなど、宗教を軸に時系列的に考察すべきとの課題を持つに至った。

２．研究の目的
本研究は、ミノア・ミュケナイ期から初期鉄器時代・前古典期にかけての古代ギリシアにおける国家と民衆信仰および宗教の諸相と変容について明らかにするものである。すなわち時系列を軸に（１）ミノア期からミュケナイ期の地母神崇拝などの民衆信仰が王権によってどのように取り込まれ、国家宗教に変容していくのか、（２）印欧語系民族のミュケナイ王権が、地母神崇拝の民衆信仰を取り込んだ先住ギリシア系のミノア宗教をどのように男系神を中心とするミュケナイ宗教に変容させるのか、（３）初期鉄器時代に起こったミュケナイ時代の墓域を利用する英雄崇拝から前古典期までにポリス宗教が確立して行くプロセスを辿ることで、国家権力により民衆が市民 polites としてどのように措定・統合されたかを解明することを目的とした。

３．研究の方法
上記研究目的を達成するため、（１）ミノア宗教と王権との関係およびミュケナイ人のミノア宗教の受容について、（２）ミュケナイ王宮の祭祀センターの分析に基づき、ミュケナイ期の宗教の実態と王権との関わりについて、（３）ミュケナイ諸王国崩壊後の宗教の受容と初期鉄器時代～アーケイック（前古典）期の宗教の変容についての３点を考察することを課題に、（１）（２）は研究代表者が、（３）は研究分担者が担当したが、毎年４回ほど定期的に研究状況の確認と研究内容の議論を行う「研究打ち合わせ」を実施して極力情報の共有に努めた。
打ち合わせでは、①それぞれが収集した関連する考古学資料や文献史料、論文等の情報交換、②本研究に関わるこれまでの研究を総括し、それをふまえて研究の方向性を確認しながら研究を進めた。③収集した考古学資料や文献史料などの情報を共同の現地調査で確認することを重視した。
＜平成 23 年度＞研究代表者・研究分担者２名は８月～9 月に約 2 週間にわたってクレタ島を中心に、ギリシア本土でもミノア期から前古典期にかけての宗教遺跡・遺物の現地調査を実施した。クレタ島では、8 月 27～30 日の 4 日間レンタカーを借り受け、(a)クノッソスやフェストスなどの宮殿やカヴーシ、ブロンダ、アゾリス、カストロ、ミルトス、ヴァシリキ、フルニ、ドレーロス、アムニッソスなどの遺跡調査の他、イラクリオン考古学博物館、アヨス・ニコラオス考古学博物館、シティア考古学博物館、イエラペトラ博物館等で調査を行い、4000 枚以上の資料をデジタルカメラに収めることができた。(b)研究代表者はアテネを中心にアクロポリス，アゴラ、ケラメイコス遺跡、近郊のエレウシス遺跡およびアテネ国立考古学博物館、新アクロポリス博物館、アゴラ博物館、ケラメイコス博物館、エレウシス博物館、ピレウス考古学博物館などで宗教関係の遺物の確認とデジタルカメラによる資料収集を行い、帰国後資料データの整理・分類を行った。研究分担者はアテネ国立考古学博物館その他での資料収集に加えて、在アテネ英国研究所と米国古典研究所において初期鉄器時代についての発掘報告書・前古典期に関する碑文の研究情報を入手し、古代祭祀関連文献を閲覧・複写した。
＜平成 24 年度＞7 月下旬～8 月中旬にアテネおよびペロポネソス半島を中心に、ミュケナイ期から前古典期にかけて現地調査を実施した。特に交通の便の悪いペロポネソスでは、8 月中旬の８日間レンタカーを借り受け、古代コリント遺跡、同アスクレピエイオン、同博物館、ミュケナイ遺跡、同博物館、ナウプリオン博物館、ティリンス遺跡、ヘライオン遺跡、デンドラのトロス墓、ミーディア遺跡、アルゴス遺跡アゴラ、同博物館、同アスピス・ラリッサ遺跡、エピダウロス聖域遺跡、同博物館、同アポローン・マレアタス遺跡、テゲア遺跡、マンティネイア遺跡、オルコメノス遺跡、バッサイのアポローン神殿、ゴルテュナ遺跡、トリポリ博物館、スパルタ遺跡、アルテミス・オルティア聖所、同博物館、同メネライオン遺跡、同アミクライ、同バフィオのトロス墓、カラマタ博物館、メッセネ遺跡、同博物館、同アルカディア門、ミストラ等で調査と資料収集を行った。研究代表者は昨年に引き続き、アテネを中心にアクロポリス，新アクロポリス博物館、アゴラ、ケラメイコス遺跡、アゴラ、同博物館、ケラメイコ

ス遺跡、同博物館などで宗教関係の遺物の確認と資料収集を行い、帰国後資料データの整理・分類を行った。研究分担者はアテネ国立考古学博物館、アテネ・アクロポリス南麓遺跡、新アクロポリス博物館その他での調査および資料収集に加えて、在アテネ英国研究所及び米国古典研究所にてポリス生成期の国家宗教に関する資料収集、初期鉄器時代の発掘報告書・古代祭祀関連文献を閲覧・複写した。このように本研究では、共同研究によって時期を分担しながらミノア期から前古典期までの長期間を国家と宗教を軸に考察できた。現地調査に重点を置き、共同でクレタとペロポネソスの宗教遺跡・博物館を調査することで、効率よく多くの遺跡・博物館調査が実施でき、分担以外の宗教の諸相と変容についても共通の認識を持つことができた。
また最終年度の平成 25 年度に愛媛大学を会場に、9 月 12〜14 日に名古屋大学の周藤芳幸教授（ギリシア考古学）、鎌倉女子大学の長谷川岳男教授（ヘレニズム期）を愛媛大学に招聘して、３カ年の研究のまとめのための研究会を開催した。研究代表者・分担者のこれまでの研究の概略・研究成果の報告と招聘者からの批判・意見を受けての討議、また研究課題に関わって招聘者の研究分野での研究情報の提供と宗教史研究の問題点などについて提言があり、研究のまとめに向け貴重な指摘・教示を受けた。その後宗教・巡礼をキーワードに、多神教であった古代ギリシアの巡礼との比較で明治期の廃仏毀釈以前の神仏習合を残す松山周辺の四国遍路札所寺院等を巡るフィールド巡検を実施し有益であった。そして研究のまとめとして３月末に『研究成果報告書』を冊子体で発刊し、今後の研究推進のため関係者に配布し意見・教示を請うた。

４．研究成果
本研究課題「ミノア・ミュケナイ期〜前古典期における国家と宗教の諸相と変容に関する研究」において、前述のように山川廣司は、ミノア・ミュケナイ期を中心に国家と宗教の諸相と変容について、古山夕城は、ミュケナイ諸王国崩壊後の宗教の受容と初期鉄器時代〜前古典（アーケイック）期のポリスの時代の宗教への変容について考察した。ここでは、①紀元前 2000 年から 1500 年頃にクレタ島に栄えたミノア文明（クレタ文明）時代の宗教、特に山頂聖所を中心に、それに関わった王権について、②ミュケナイ期ピュロス王国のポセイドーン崇拝とポトニア崇拝を採り上げ、宗教と王権について、③クレタをフィールドに、初期鉄器時代から前古典期の歴史的展開を考古学の研究成果と前古典期碑文の分析により跡づけ、国家形成と宗教の関わりについて考察した。

（１）　ミノア期のクレタ
ミノア期の宗教と王権については、クノッソス近郊にあるユクタス山 Mt.Juktas の山頂聖所を採り上げる。ユクタス山はクノッソス宮殿からみると南方向に聳える山で、その頂上に聖所が建っており、後方に野外の祭壇と大地の裂け目があった。ギリシア人の考えでは冥界とつながるのは地上の洞窟や大地の裂け目で、人が亡くなれば冥界に降りて行くという考えから、そのような大地の裂け目や洞窟は冥界への入り口であり、聖なる所とみなされていた。ここにはそういった大地の裂け目があり、発掘によりその裂け目に投げ込まれて堆積した様々な祈願の奉納物が出土し、現在各地の博物館に展示されている。またクノッソス宮殿は中央広場を中心に、西側地区の祭祀が行われる聖域をはじめ各所に聖所が設けられ、宗教儀式に関わる豊富な安置品・奉納品が出土している。さらにクノッソスとユクタス山の山頂聖所を結ぶ線上に位置する中腹のアネモスピリア Anemospilia（風の洞窟）遺跡では、1979 年に発掘が行われた際、興味深い事実が判明した。紀元前 1700 年頃にここで宗教儀式が行われている最中に地震が起った。祭壇の上に 17 歳の少年が縛られた状態で埋もれていたことから、何らかの事情で生け贄として捧げられ、その他に生け贄の儀式を執り行った祭司と思われる男女２遺体等が散乱し、生け贄儀式終了直後に地震が起きたと推測される。
以上を検討した結果、①山頂聖所は、もともと牧人らの素朴な民間信仰が農民も巻き込んで発展していく中で、権力の維持・強化を図るミノア王権がそれを取り込むことで公的崇拝の場として繁栄したということである。②民間信仰の崇拝所であった山頂聖所を取り込んだミノア王権が、祭祀王として自らが各種の宗教儀式を執り行うことでその権力支配を強めた。すなわち王権強化のために山頂聖所を利用したことから、王権が宗教と深く関わっていたと考えられる。③クノッソス宮殿内に多数の聖所があり、王権と宗教の深い関わりを見ることができる。また近年クノッソス宮殿周辺の発掘により、周辺にも小宮殿やヴィラ、聖所などの遺構が散在していることから、ここでは宮殿を中心にそれを取り巻く周辺にも有力者が住む地域が広がっており、これらの地域を含めて王国は繁栄していたと思われる。④アネモスピリア聖所で人間犠牲が行われていたことに関連して、プルタルコスの「テーセウス Theseus 伝」が想起される。当時アテナイはクレタに従属しており、9 年毎に少年少女 7 人づつを差し出し、彼らはミノタウロスの餌食となったとされる。実際は人質だったと思われるが、このように神話、伝説の中にも人間犠牲の痕跡があって、おそらくクレタ島では人間犠牲を伴う宗教儀式が行われていたであろう。そして山頂などの聖域の境界や宮殿には宗教儀式を執り行なう聖所や祭壇が設けられ、王権によって一元的に宗教儀式に活用されていたのではないかと推測される。⑤聖所遺跡や出土した多種多様な献納品から、

クレタの宗教が王を頂点に宗教儀式を盛んに挙行するということで、宗教と王権が密接に結びついていたと思われる。要するにミノアの宗教は祭政一致で政治と宗教が繋がっており、政治が宗教を活用しながら権力の維持・強化を図っていたことから、ミノア文明が豊かな宗教性を持った文明であったといえる。

（２）ミュケナイ期の宗教と王権

15 世紀 BC にギリシア本土からクレタ島に渡り、クレタを支配したミュケナイ人は、彼らの宗教にミノア宗教を習合するなかで、山頂聖所信仰は引継がなかった。そして印欧語系民族の男神を中心とする信仰が確立され、ギリシア各地の王国で崇拝され、王（wanax）が王国内の聖域および王宮内の聖所などで宗教の統括者として権力を維持・強化を図った。

ここでは宗教教義等の宗教内容についての検討ではなく、むしろ文書などから辿れるミュケナイ期の宗教儀式の様態や王権が権力維持・強化のために宗教をどのように利用したかについて検討したが、とりわけ線文字 B 粘土板史料が最も多く残存するペロポネソス半島西南部のピュロス王国において最も重要視されていたポセイドーン神とポトニア女神崇拝を中心に、ピュロス王国の王権と宗教について考察した。

まとめると①宗教と王権の関係については、ホメーロス（*Od.*, Ⅲ, 1-101）からは、ネストール王によって挙行されていたポセイドーン神へのヘカトンベ―祭の供儀の概要を知ることができるが、ピュロス出土線文字 B 粘土板文書 Un718 はサラペダにおいてポセイドーン神に数々の産品が献納されており、王権による公共祭儀が野外で定期的に行なわれていたことを示している。また Tn316 文書でもピュロス王国の重要な聖域があったスパギアーネス地区で、航海が始まる３月に王権が宗教儀式を挙行し、ポトニア女神をはじめ神々へ献納を行なっているが、ここで注目されるのが Es シリーズに見られるように、臨時の献納が行なわれていたことである。このように王権が統轄する役人たちによって王国内の支配領域から献納品を定期的・臨時的に徴発し、王宮の財産目録に記録した上で貯蔵庫に保管・管理し、王が統轄する儀式・饗宴などに際して必要に応じて支出していたと思われる。②王宮内には複数の聖所があり、そこで公的儀式と並んで私的儀式（秘儀）が行なわれていた。ポトニア女神はミノアの大地母神崇拝に起源するが、ポトニア崇拝も公的な儀式として行なわれた。特に Tn316 文書ではスパギアーネス地区の聖域での供儀で、ポトニアをはじめ神々に黄金製品と並んで人間（男女）が儀式の際の生贄として献納されている。文書の混乱した書き方からも、これは王宮の緊急事態下で執り行なわれた特別の供儀のために臨時に行なわれた献納の文書で、当然ポトニア女神にも献納され、その聖所で上記の目的のための供儀が行なわれたのであろう。一方 Jn310 文書で、ポトニアに属する香油作りや冶金師集団が青銅の原材料の支給を受けているが、彼等はポトニア女神の崇拝者で、その女神の団体組織のために生産活動を行っていた。またこれらの職人たちの仕事場に隣接して王宮内にポトニア女神の聖所があるが、ここは王を中心に男・女祭司団等限られたメンバーによって執り行なわれる崇拝場所であると同時に秘密の知識をメンバー内に限定して共有することで特別の能力や権威を維持するための私的儀式（秘儀）の場でもあった。このように王国崩壊数ヶ月前ではあったが、王権が崇拝儀式を統轄することで宗教を梃子に権力の維持を図ったと思われる。③王権が宗教を梃子に権力の強化を図ることはミノア・ミュケナイ両者に共通するが、権力の担い手が先住ギリシア人のミノア人から印欧語系のミュケナイ・ギリシア人に移行する中で、当然宗教も変容を余儀なくされた。例えばミノア人が崇拝していた地母神信仰が、ミュケナイ人が持ち込んだ男神信仰に組み込まれる中で先住民の神々とギリシア系の神々の習合が行なわれ、線文字 B 文書にも両者が混在して記載されている。また牧人の豊穣祈願から始まり、ミノア王権がその権力強化のため取り込んだ山頂聖所もミュケナイ人に引継がれなかったが、クノッソス宮殿各所に見られた聖所が、城壁で囲まれたミュケナイ王宮内にも点在しており、特に王宮のメガロンや西側斜面の傾斜地にあった祭祀センター等が注目される。またエレウシスのテレステリオンの下から発掘されたミュケナイ時代のメガロンの遺構から犠牲獣を焼いた痕跡が発見されたことから、キャスルデン（*The Myceneans*, pp.145-146）は宗教的側面を重視し、当時すでにここが神聖な場所で、後の神殿になるとしている。ミュケナイ王権も宗教儀式を指揮統轄することで権力の維持・強化を図ったが、12 世紀 BC に王国の崩壊とともに王権が掌握していた宗教儀式も消滅した。

（３）初期鉄器時代・前古典期のクレタにおける宗教変容と法の世界

本研究では、王宮ないし宮殿が社会経済の中心に位置する後期青銅器時代から、新たな政治と祭祀の共同体であるポリスが生じた前古典期まで、宗教がいかなる形で社会の統合に寄与したのか、初期鉄器時代以降の社会の宗教がどのようにしてポリスの時代の宗教に変容していったのか、すなわちギリシアにおける国家形成と宗教のかかわりを解明することとした。まずこの課題に取り組むにあたって、クレタにおける初期鉄器時代から前古典期の歴史的展開を、考古学の研究成果と前古典期碑文の分析による解明を試みた。そこで①近年の考古学調査から明らかになってきた初期鉄器時代の集落と聖所のあり方を概観し、②それによって得られた知見を線文字 B 粘土板文書にあらわれるオリンポス神の姿と突き合わせて初期鉄器時代から前古典期への宗教変容を

推定し、③ポリスの下であらわれる法を詩人の歌とのアナロジーから神の声と法の世界の位相空間についての３点を考察することとした。
①「ポスト宮殿期」にはかつて宮殿のあった場所の多くは放棄されたが、クノッソスやアイヤ・トリアダなどいくつかの拠点では再居住があり、またハニアのようにこの時期に海外との交流を持って繁栄した都市も存在した。「ポスト宮殿期」の宗教施設は、クノッソス、アイヤ・トリアダ、グルニアなどで発見されており、埋葬においては、岩室墓に様々な装飾図像を描いた長方形の陶棺に遺体を収める方式が新たに導入され流行した。初期鉄器時代のクレタの集落状況は、かつての宮殿のある地域に再居住したクノッソスを代表とする「大規模拠点集落」とカルフィやカヴーシなどの山岳高所に突如出現した「避難集落」の 2 つに大別され、それぞれに宗教活動の焦点化された区画ないし施設が存在したが、その存在形態は異なるものであった。またこれらとは別に僻遠の山間の谷や洞穴に設けられた聖所が存在したことも確認されている。そこから推測されるのは、「万歳女神像」や「スネーク・チューブ」の出土に見られるように初期鉄器時代の宗教は後期青銅器時代の宗教的性格を引き継いでいたことである。地母神信仰に結び付けられるこの二つの出土品は、より大きな視野からは自然崇拝ないしは自然への畏怖の表象と捉えることができる。人の住む地上を上下に挟み、人力も人知も及ばぬ「天の世界」と「地下の世界」への畏れは、厳しい環境下で生き抜いていかねばならない当時の人々の宗教のあり方を決定づけたであろう。その宗教活動を実践するトポスは、天の世界へ向けて野外の聖所と地下の世界へ向けての洞穴聖所だけではなく、集落の中にも特別の空間に聖所として設けられた。初期鉄器時代においても、青銅器時代と同様、自然崇拝と女性神信仰が宗教の基本性格であった。
②クッソス線文字 B 文書で確認または推定できるオリンポス神は、ゼウス、デメテール、アレス、ポセイドーン、アテナ、アポローンの 6 神である。考古学的な痕跡を残さなかったが、最終宮殿期に確認できるオリンポス神への信仰が、前古典期になると神話伝承でも青銅彫刻でも碑文史料でも、オリンポスの神あるいは男性神の姿で目に見える形ではっきりと表れる。では宗教におけるこの変容は、どのようにして起こったのであろうか。ここでは前古典期の法碑文による秩序形成が、主としてアポローン神の加護の下で行われた状況と、ミノス王が父であるゼウス神より 9 年ごとに山頂で法の啓示を受けたという神話伝承、そして前古典期以降にも地下神信仰や豊穣の地母神信仰がおもに女性神格への崇拝として続いていることを念頭に置き、仮説的な推定として以下の変容の状況を提示した。すなわち前 7 世紀に入ってこの宗教のあり方に大きな変容が生じた。そこでは前代までの古い信仰が完全に否定されるのではなく、新たな宗教体系の中で選別と役割付けを受けて生き続けた。初期鉄器時代のクレタで崇拝された神々は、共同体の存亡にかかわる神として主たる信仰の対象であった自然・女性を基本的性格としたが、生産環境が整い社会の安定が向上した時期には神格としての地位が低下し、オリンポス神を主たる信仰の対象とする宗教体系の中に組み入れられていった。それに相対して、かつては諸々の事情にかかわる外延の神としてまだ下級の地位にあったオリンポスの神々が、国家による社会秩序の構築と維持という課題に応える主神格として崇拝の中心を占めるようになったと考えられる。
③宗教変容を果たした前古典期クレタのポリスにおいて、国家の安寧と秩序の維持をもたらす神格は、中心部の丘（アクロポリス）や広場（アゴラ）の近傍に建立された神殿に祭られた。安寧や秩序を破る行為に対する対応と処罰を定めた法碑文として知られる金石文史料が今日発見されるのは、そうした神殿ないし神域の建造物であった。またこれらの法碑文が意味を持った法として顕現するには、ただ文字として記録されるだけでは不十分で、それを集団の前で読み上げるという、声による実体化の儀礼が不可欠であった。
ポリス形成期の社会秩序の創出は、クレタでは宗教の面で神の世界の秩序転換、秩序の転倒ともいうべき大きな変容として展開した。宮殿を中心とする行政と物流のシステムが消失した後、生存環境としては極めて厳しい状況にありながらも、初期鉄器時代のクレタは安定した社会を 500 年以上も継続させたが、前 8 世紀から前 7 世紀にかけて大きな変容を経験した後の前古典期のポリス社会は、秩序化のために法碑文を神聖なる空間に刻みつけておかねばならないほど、不安要素の多い社会であった。人と人との合議で妥結された取り決めは、神の威を借り人の声を通じて、ようやく法として機能できたが、決して絶対の真正の法ではなかったため、本質的に脆弱で危ういものであった。
最後に今後はギリシア本土、とくにペロポネソス半島における国家形成のプロセスを歴史的跡づけ、クレタの状況と比較分析することによって、ポリス成立の実相に迫るべく研究を継続したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計６件）

① 山川廣司、ミュケナイ時代の聖所、駿台史學、査読有、第 147 号、2013、1-23
② 山川廣司、古代ギリシアの宗教と王権―山頂聖所とミノア王権―、第 5 回四国地域史研究大会プロシーディングズ、査読無、2013、5-15
③ 山川廣司、ミュケナイ期ピュロス王国の宗教と王権-ポセイドーン崇拝とポトニア崇拝、愛媛大学法文学部論集人文学科編、査読無、第 36 号、2014、99-122

④ 山川廣司、ミノア期からミュケナイ期における 宗教の諸相と変容、平成 23〜25 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）研究成果報告書（研究課題番号：23520901）、査読無、2014、5-25
⑤ 古山夕城、アルカイック期クレタにおける法碑文のコスモロジー―形式・形態分析と現象論―、駿台史學、査読有、第 147 号、2013、25-69
⑥ 古山夕城、クレタ暗黒期からアルカイック期の宗教変容と法の世界、平成 23〜25 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）研究成果報告書（研究課題番号：23520901）、査読無、2014、27-42

〔学会発表〕（計１件）
① 山川廣司、古代ギリシアの宗教と王権―山頂聖所とミノア王権―、第５回四国地域史研究大会（招待講演）、2012.10.27、愛媛大学総合情報メディアセンター・メディアホール

〔図書〕（計１件）
① 山川廣司他、岩田書院、四国遍路と山岳信仰、2014, 131

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
山川廣司（YAMAKAWA, Hiroshi）
愛媛大学・法文学部・客員教授
研究者番号：30113682

(2)研究分担者
古山夕城（FURUYAMA, Yugi）
明治大学・文学部・准教授
研究者番号： 10339567

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：